１．　学校研究全体計画

（１）本校の研究主題および副題について

「自分の考えを持ち、ともに学び合う子の育成」

～子どもが学びの積み上げを自覚する国語科の授業作り～

①　研究主題設定の理由

変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちは、学校で学んだことを基盤に、社会に出ても学び続けていく必要がある。だからこそ、基礎的な学びと出会う小学校期には、一人ひとりの子どもが学ぶことの意義や学び方を理解し、学ぶ楽しさに触れ、主体的に学び続ける姿勢を身に着けていく事が特に重要であると考える。

本校は長年にわたり、算数科の研究を行ってきた。昨年度は主題を「子どもが主体的に学ぶ授業づくり」副題を「ねらい達成のために”比べて考える“」として、つけたい力を明確にした教材研究、児童全員が見通しを持ち学習課題へと考えていけるような導入、子どもの思考を予想した上での教師の関わり方を重点として、研究実践を行った。また、実践を進めていく中で、「教師の関わり」について「比べて考えるため」という視点を新たに設け焦点化して実践に取り組んだ。長年の研究の成果として、教師と子どもが授業の流れを共有し、互いに見通しをもって授業ができるようになった。また、一昨年度からの「比べて考える」視点により展開部での発問などの教師の関わりがすっきりし、児童の意欲も持続するようになった。

しかしながら、研究を行っていく中で、授業の展開部分における学びの広がりや深まりが充分には生まれていない、という課題が明らかになった。そこで、子ども達一人ひとりが意欲をもって自分の考えを表現し、活発に意見を伝え合い聴きあいながら学ぶ授業を通して、学びを深めていきたいと考えた。そのような子どもの姿を目指していく中で、解が明確な算数科では、自分の考えを持つことができない、自信がなくて友達に伝えることができない子が多いという本校の実情から、多様な考えを認め合うことのできる国語科、特に物語教材の研究に転換をすることを決めた。

②　研究仮説

子ども達がともに学び合い、考えを深めていく授業を目指す。そのためには、まず、自分なりの考えや思いをもつことが前提になる。その思いや考えを友達と交流することで、新しい見方を得たり、深まったりすると考える。つまり、全員が課題に対して考えをもってこそ、学び合いが始まるのである。

全員が考えをもつために、これまでの国語科の授業において何が足りなかったのかを考えると、「何を教えるのか」が曖昧だった点にある。教師が「何を教えるか」を明らかにし、子どもに「何を学んでいるか」を自覚させることが不十分だった。国語科の授業も算数科と同じように、各学年で学んできたことが明確であり、子ども達が学びを自覚し、それらを使って学習するという経験を積み上げていくことが必要であると考えた。そうやって物語教材を読むことができれば、全員が考えをもって学び合いを始めることができるだろう。

そのためには物語を自分なりに分析するための読み方の方略を学ぶ必要がある。そうすることで、読み方が分からず内容が捉えられなかった子どもも、物語を理解し、考えをもつことができるようになるだろう。読みの方略を学ぶことは子どもにとって物語を読む際の手掛かりとなると考えられる。ただし、読み方を教え込むのではなく、子どもの気づきを重視し、授業で友達の話を聞いて刺激を受けたり、新しい見方を得たりすることを通して学びを自覚することが重要である。そうすることで、子どもが読みの方略を自分のものとして多様な物語に対して使いこなすことができると考える。そのために教師は、読みの方略をどのように子どもが身に付けるのかを認識し、その学習を促進する手立てを考える必要がある。

今年度は、国語科の研究１年目として、子どもが物語を理解し自分の考えを持つために、物語の読みの方略を身に付け学びを自覚するための単元構成に重点をおき、実践を進めていきたい。また、「何を学ぶか」を明らかにすることで、単元のゴールの姿の明確化し、子どものふりかえりを分析することで、子どもが学びを自覚しているのかを見取り、改善を繰り返しながら実践を進めてきたいと考える。

さらに、授業づくりに併せて、人間関係づくりや学習規律の徹底、基礎基本の定着など学びの土台となる力を醸成していく。授業づくりと学びの土台作りの２つを両輪として、さらに子どもたちの主体性を高めるような授業を目指していきたい。

（2）研究内容

1．授業づくり

（1）．子どもが各学年の国語科の物語教材において何を学ぶのかを明らかにする（系統性とゴールの姿）

（2）．子どもがつけたい力をつけ、学びを自覚するための単元構成**(重点)**

①これまでの学び（国語のアイテム）を確認する時間の確保

②学んだことを生かし、試すための言語活動

③単元を振り返り学びを自覚「この単元でどんなことを学んだか」

2．学びの土台づくり

（1）．個別最適な学び・協働的な学びのための ICT の効果的な活用　（担当　天田）

（2）．学習規律の徹底　（担当　生徒指導　）

（3）．確かな学力（基礎基本の定着）　（担当　教務部　中村　）

3．検証

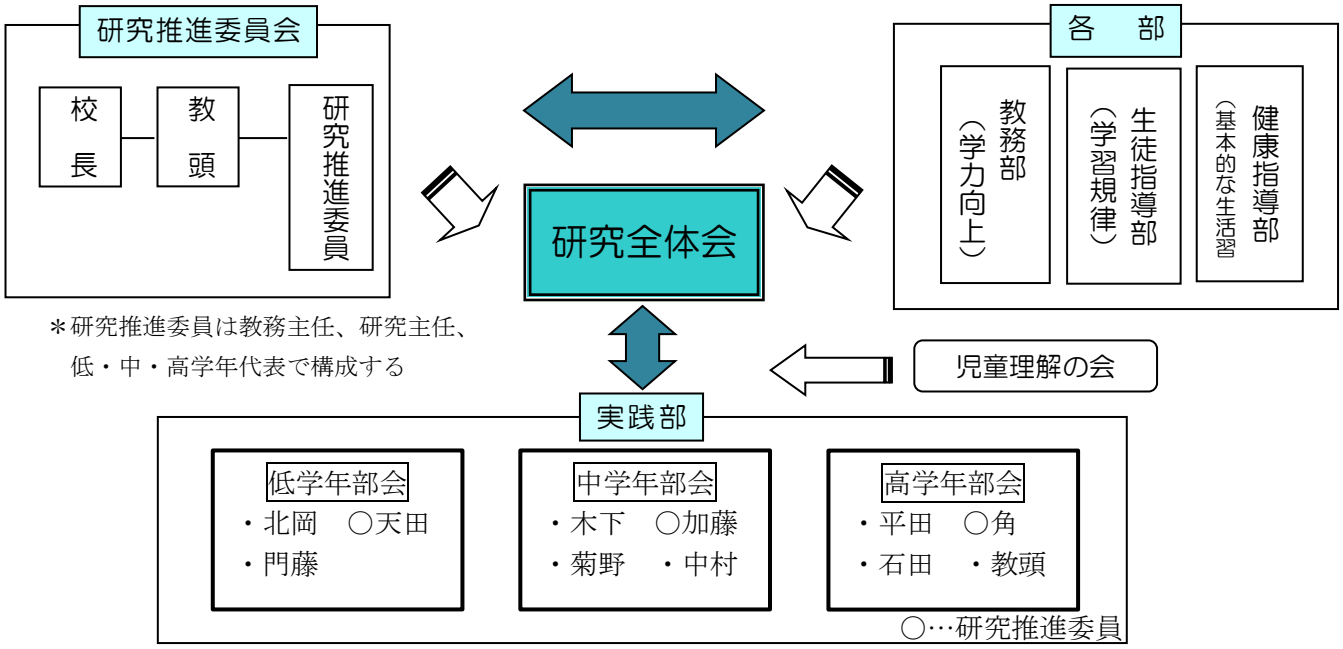
（1）．単元の振り返りによる子どもの姿

（2）．アンケート

（3）．授業交流

（4）．ミニ部会

（3）研究組織



（4）研究の進め方

・研究推進委員が中心となり、各部会との連携を図りながら、研究を進める。

◎研究全体会では、授業研究（授業づくり研修・指導案検討・授業整理会）を中心に研修する。またその他学習会などを行い、取り組みの共通理解を図りながら進めていく。一人一回の研究授業を行うこととする。

・授業交流の際には授業構想シートを作成、公開し、共通理解のもと交流できるようにする。

・低・中・高の各実践部会を随時開き、教材研究・指導案検討・部会研究授業・児童の実態把握などを行う。

・先進校の研修会や各種講演会に参加して学び、他の職員に広める。

２．研修計画

	全　体　会	部　　会
4 月	年度始めの共通理解（研究主題、構想、研究の進め方、研究の重点事項の確認、各学級の取り組み）	年間計画作成
5 月	研究全体会（授業づくり研修①） 指導案の書き方共通理解 **提案授業（全体：６年）** ミニ低中高部会	児童の実態把握
6 月	**研究授業（部会：２年１組）** 授業交流 ミニ低中高部会	
7 月	**研究授業（部会：４年）** 授業交流 各学級の取り組み１学期の反省・中間報告	児童アンケート・１学期の反省 児童の実態把握
8 月	指導案作成 指導案部会検討	２学期の取り組み再確認
9 月	**計画訪問（全体：５年）** ミニ低中高部会	
10 月	**研究授業（部会：１年）**	児童アンケート
11 月	**研究授業（全体：２年２組）** ミニ低中高部会	
12 月	**研究授業（部会：３年）** 授業交流 ２学期の反省	児童アンケート・２学期の反省 児童の実態把握
1 月	**もくれん公開授業** ミニ低中高部会	３学期の取り組み再確認
2 月	年度末の共通理解（今年度の反省、来年度の方向性）	今年度の振り返りと次年度に向けて